

21 年度特活進路部会夏季ゼミナール

記念講演「子ども達に自己実現力と夢を育てる指導の在り方」から

講師 大阪教育大学監事 野口克海 先生

H.21.8.17

夏季ゼミを企画する役員会で、恒例の激励訪問をしていただいた秀学社（中学校進路指導資料「生きる」を発行）より、講師の先生のご紹介がありました。「どんな講演内容でも対応できます」という触れ込みでしたが、まさしくその通りの講師でした。野口先生は、府立公立中学校に 15 年間勤務され、その後は行政職を歴任され、退職後、私立中学校・高等学校校長を経て、大阪教育大学の常勤監事として活躍されています。

休憩中のお話で、「これまで8年間、府内の見所のある教員を夏休みに 50 名ほど集めて」2泊3日の研修会を行ってみたいとのこと。そこでは、2学期からの学級経営についてプレゼンにまとめて実践交流を行うため、ほとんど徹夜状態で取り組むそうです。その校正をされる野口先生も徹夜です。また、管理職についても1泊2日の研修会を実施してみえます。当然ながら、府教育委員会からの要請や支援があつてのことだと思えますが、すでに“野口学校”の卒業生から指導主事が出始めているとのことで、野口先生も府の教育の今後について大いに期待されているようでした。

その野口節のあらすじを紹介します。参考になれば幸いです。

初任は公立中学校で、1学年5クラスの落ち着いた学校でした。自転車で家庭訪問をすると、帰るときにカゴにたまねぎやじゃがいもをほうりこんでくれるのどかな地域でした。先輩に、「軒下訪問（連絡だけ）」や「つげ口訪問（学校での子どもの問題を告げる）」なら行く必要がないと言われました。そして、「野口さんも親になるとわかるが、母親というのは、一度くらいは（この子の首をしめて死んだらどうか）という大変なところを乗り越えている。駆け出しの教員が、子どもにこのようにさせてくれなどと言っても、伝わらない。共感的な理解や受容する姿勢が大切だ。」とも。そういう記憶は今でもしっかりと残っています。平和な学校で、教師のイロハを教えていただいた。最初の五年間で、教師の有り様をたたき込んでもらったと思っています。

後に、私立の中学校・高等学校の校長をさせていただきましたが、時代が変わったと痛感したことがあります。70人以上いる職員に、昔先輩にされたように「今晚、駅前で飲みませんか？」と若手職員を誘ったら、「前日に言ってください。」と断られました。昔とエライ違いや。困難校におりました時は、何かあれば飲み会で、1学期に1回は親睦旅行。それも学年で計3回、全校で1回と、夜を徹して語り合う機会が多くありました。教育はチームですもの。話し合いもろくにできないような職員で、どれほどのことができるのでしょうか。

さきほどリクエストがありましたので、少し困難校での実践について触れます。2校目に赴任したのが〇〇中学校で、1400～1500人ほどの学校ですが、近辺の方に「〇〇中・・・」と言っただけで、「こわーっ」と後ずさりされる学校でした。若気の至りで、初任校の5年間が終わって、（若いうちに困難校で勉強したい。よーし、〇〇中を希望しよう・・・）と思い、校長先生にお願いしたら、即かなえられ8年間勤務することになりました。振り返れば、今の私をつくってくれたのは、この8年間とも言えます。

4月1日着任して、校長先生、教頭先生にご挨拶しようと職員室に行きました。伏し目がちに挨拶をしながら職員室に入り顔をあげたら、なんと教頭先生の机の上に生徒があぐらをかいて堂々とたばこを吸っています。（逃げな。いやいや、



今日からここの教師や。注意しよ！) と思って注意をしたら言い合いになり、あげくに机の上にあったガラスの灰皿を顔にぶつけられました。めがねが割れて顔中血だらけになりましたが、(ここで負けちゃあかん!) と、胸ぐらをつかんで引き倒しました。……ま、こんな学校がその後、見事に変わったのです。

当時、2名のボスの生徒がおり、30名以上の暴走族を結成して単車で走り回りました。この生徒が登校すると、各学級の生徒が教室を飛び出しました。職員会で、この2名を“隔離”してマンツーマンで立ち直らせたらという意見が出ました。期間は一ヶ月・「そんなもんでだめ。やるなら直るまで無期限や。」とか、職員は口々に賛成を唱えましたが、誰がそれをやるかということになって、私と新採の教師が選ばれました。三重県の廃村の施設を利用して、分校という形で、ボス2名と教員2名が行くことになりました。それができたのも、大規模校であり同和加配もあって、比較的自由がきいたことがあります。松阪からバスで2時間、停留所から30分ほど歩いて着くところでしたが、脱走の場合を考えて、大台ヶ原から2泊3日の山越えルートでいきました。案の定、脱走がありましたが、子どもは山を越えて逃走し、夜を迎えて震えていました。私たちが探しに行くと、両手を広げて泣きながら飛びついてきました。どれだけ悪い行為をしていますが、やはり15才の子どもなのだと思っていました。

分校での生活は、寝るときも勉強も一対一です。食事と夜の反省会だけ4人で行います。一ヶ月半たった頃、寝ようとしたら、子どもが話しかけてきます。その子が4才の頃、病気で死にそうになり、父親が病院を探してかけずり回ってくれたが、母親は男をつくって逃げたこと。その後、弟とともに施設に預けられたこと。寝小便への対応で、ビニールをしいた布団で寝ていたこと。冷たくて寝返りが打てなかったこと……。そして、「先生の子どもの頃はどうやったん。ぼくのために、嫁はんほったらかしにさせてすまん。」……。手を握り合って語り合ったものです。

翌日、その子は一番エエ顔をしていました。学校では、朝から(なんとかしないかん。きちんとさせないかん。)と子どもと正面からぶつかっていましたが、何も成果はあがりませんでした。空海の言葉に、“同行二人”というものがあり、同じ方向を向いて二人で歩くことです。教師と子ども、親と子ども、一緒に頑張ることが大切なんですね。

夜の反省会は家族会議と呼んでいましたが、すべて録音をしていました。ある日、風呂をたくため柴刈りに行ったのですが、私の目をどのように盗んでか、帰ってきたら生徒からたばこのにおいがしました。反省会では生活点検ということで、様々な項目に○×を打ちます。たばこを吸わないという項目もあり、生徒は○をうちました。私は、この時とばかり問い詰めました。厳しい言葉を浴びせると、登山客からカツアゲしたとのこと。「何のためにこんなところにこもってやっと思ってるんや!」と、大声で怒鳴りつけ、生徒の「すみません。」と謝る声も録音しました。この録音テープは、日曜日ごとに食料などをもってやってくる本校の職員に渡し、週2回ほどの道徳や学活の時間に流しました。こういうトラブルのやりとりもあれば、「昨日8時間勉強したので100点とれたんや。」など喜びの声も流しました。

それまで、本校の子ども達は、(学校の教師なんか何もできない。)とっていました。ですから、2年半にわたって、生徒会役員立候補は0でした。生徒にしてみれば、(こんな学校で生徒会役員なんかやったら、すぐにボコボコにされる。)というのが常識だったわけです。それが、この分校生活スタートで、教師集団の本気を感じ取り、ワルにつくより先生についた方が安全と変わっていったのです。後期の生徒会役員選挙では、40~50人の立候補者が立ち上がりました。選出された役員達は、学校の決まりを0から見直し、新しい校則をつくりだしました。その中に、「シャープペンシルを持ち込まない」というルールがありました。「シャープペン禁止は厳しいのでは?」と言うと、「これを許すので、ペチャ鞆に何も入れず、胸にシャープペンという生徒が出ます。筆記用具入れに、鉛筆や消しゴムを入れてこなくては」。生徒会や児童会の力をなめたらアカン。自治の意識が芽生えるとうごいと思います。

この学校で8年間、連続して3年生を担当しました。一年目から最後までずっと3年生ですから、「修学旅行の鬼」というアダナもつきました。ある時、同僚の先生のツテで、岐阜県ひるがの高原に住む山持の社長と会うことになりました。私は、その社長さんに対して、「様々な仕事をされてお金を稼いでみえる社長さん、こらで社会に寄与することで名誉を得られてはどうか?」と水を向け、かねてから思っていた理想的な修学旅行用のホテルの条件をまくしたてました。風呂は500人を30分間でいれることができる。廊下はまっすぐで、端には教師用の部屋があって監視しやすいなど、細かな条件を説明して……。建設されたのが、郡上高原ホテルです。この岐阜県は、私にとっても因縁のある地なのです。

レジメにもどります。この頃は、ひとりぼっちの子が増えました。ある小学校の教頭さんの話。「反発する子どもを厳しく指導していたら、つい涙が出て、涙声で叱り続けました。翌日、その子が職員室に来て『だっこして』と甘えるのです。」困難校での養教さんの話。学校の誰よりも、問題を抱え

る子ども達の相談役になっていた彼女。たまに校長室に来て、「頭が爆発しそうです。」そんな時は聞き役に回り、必要な対応をとったものですが、養教さんにしか話ができない生徒がたくさんいたのです。群れで遊んでいない子が増えたように思います。自分の娘もそうでした。6年生の時の土曜日、たまたま珍しく家にいた私は、遊びにきた娘の3人の友達たちとの様子をそっと見にいきました。そしたら、4人がそれぞれ別の方向を向いて、別々に遊んでいるのです。「一緒に遊べば・・・」と言うと、「遊んでいるよ。」と娘。「一緒に遊ぶということは、一緒に何かをすることだよ。」

子ども達に生きる力をつけるために、4つのことが大切だと思います。①子どもをつなぐ安心な居場所づくり、②子どもをエンパワーする集団づくり、③自己肯定感の育成、④夢を希望に、希望を目的に、です。①では、子どもが横につながることです。ヤマアラシのジレンマという言葉があります。仲間と一緒にいたいけど、ハリがじゃまして互いに血を流し合う。その経験をふまえて、血を流さない距離、ヤマアラシ距離を体得することが必要だということです。大人の説教では身につけません。人間は、人間関係の中で育つもの。子ども達の学習・生活環境が安心した居場所となっているのかを常に気を付けることが大切です。

不登校生徒を0にした池田中学校では、校長先生は職員に対して「子どもの話をよく聞いてやってくれ。」と言われたただけだそうです。それまでの池田中学校は、朝からルール違反を注意する教師の声が響いていたそうですが、校長先生の子どもの傍らで話を聞き励ます姿勢で、職員が変わっていきました。

②では、子どもに自治の力をつけることです。私立高校の校長の時、当時の2年生では続けて事件が起き、中退者も多くいました。修学旅行は私立ですので、ハワイ・ホノルルでしたが、空港での校長挨拶で、「先生に怒られない修学旅行にしよう。」とか、「学校の看板を背負って、胸を張って出発してほしい。」などと話しましたが、生徒達の返事は小さな「はい。(こりゃあ、アカン)」と思い、今度は引率の先生方に大声で、「生徒をおこるな」「子ども達を信じてくれ」と訴えました。そうしましたら、ソフト部のキャプテンでしたか、「みんなで協力して楽しい修学旅行にしよう！」なんて声をかけ、「エイエイオー」と子どもと一緒に盛り上がりました。最後は、一人一人とハイタッチして送り出しました。どの子の顔も生き生きしているように見えました。

③では、ある学校で新採の先生の指導として、ベテランの先生の授業を一緒に見に行きました。良い授業指導法を教えようとしたのですが、“流れ星”授業でした。あとからベテランを呼んで指導しましたが、一人で説明して一人でうなずいているのです。一部の子どもと問答し合う“扇形”の授業でもまずいのですけどね。せめて1時間に1回でもいい。“ダイヤモンド型”授業のように、子ども達が意見を交わす授業を仕組まないと、一人一人の子どもの良さも現れません。

④は、まさに今日の会のために考えたものです。キャリア教育の原点ともいえるべきものです。園田学園高校と言っても知っている人は少ないと思いますが、伊達公子の出身校といえばわかってもらえるかと思います。伊達さんと対談をすることがありまして、その中で、6才からテニスを始めたことや、小中学校を滋賀県で過ごしたこと。園田学園高校に来て、テニス部に入ったが猛烈な練習にネをあげそうになったこと。「なぜ、テニス部をやめなかったの？」と聞きましたら、「私がこの学校を選びました。自分に負けなくなかったからやめませんでした。」そして、「この頃の親は子どもの将来を簡単に決めすぎです。テニスの教室で、子どもにテニスの才能があるかとよく聞かれます。私は、打てない子が打てるように練習を繰り返すのも才能だと答えています。」自分で選んだことに責任を持つこと。努力を続けることこそ才能。子ども達に伝えていきたい言葉です。

本日は、短い時間で話がつくせませんでした。ご静聴誠にありがとうございました。

※この講演記録は、メモ書きから起こしたものであり、お話の全部ではありません。このホームページへの掲載は、野口先生ご本人の校正と了解を受けた上で行っていきます。

野口先生は、65才ほどのご年齢でしょうか、明快な言葉と関西弁の温かい語り口が魅力的でした。何より、2校目の困難校での実践や、校長としての困難校経営の話で、“教師としての誇りや使命感”がピンピンと伝わってきました。

この特活進路部会にも困難校を経験した教師はたくさんいます。しかし、これほど“命がけ”で子どもや親に関わることができたかと思うと、恥ずかしくなりました。

大阪府行政での20年あまりを経て、大学の監事としてさらに後進の教師を厳しく温かく指導してみえることを思うと、“教職が天職”という希な教師の一人だとも思いました。

2学期が始まります。野口先生のように命をかけて指導にあたることはできないまでも、目の前の子どもの将来を見通しながら、一歩でも前に進めるように導いていかねばと思います。頑張りましょう。